

2027年国際園芸博覧会政府出展懇談会（第3回）発言要旨

日時：令和5年3月27日（月）16:00～18:00

場所：中央合同庁舎3号館11階特別会議室（オンライン併用）

- 日本の国土はひとつであり、花と緑、園芸と公園と分かれずに、引き続き二つの省で一緒に取り組んで欲しい。
- 大阪花の万博の頃はせわしなく準備が進み、いわば「ファストの時代」だったが、今は「スローの時代」。日本の国土の豊かな自然環境と自然共生社会は、世界的に見ても相当通用する。そこで蓄積された日本文化を踏まえ、おそらく「ファストの時代」で進んできた地球全体において、21世紀の中葉に目指すべき地球社会の姿、文明の転換期の方向性をこの博覧会で示すことを目指して欲しい。
- シビリゼーションに対し、カルチャーの世界をもう一度見せることで、平和につながる可能性がある。文明はどうしても競い合うことだけが突出するが、平和との両方が必要。
- 基本計画図については、この後の基本設計に入るにあたり、フレームとして考えるもの。
- テーマについては、例として記載されている3つで大体のキーワードは揃っている。どういう表現にするかという点が残っているという認識である。
- 政府出展のテーマの例について、国交省の考えで「みどり」が使われているが、しっかりと「農」を含めたみどりという概念を入れ込みたい。ローマ字の「MIDORI」を一つの新しい概念として提案してはいかがか。
- 展示計画の展示フローについて、日本古来の文化・知恵があり、現在の課題提起、そして課題解決・これからの未来となっているが、来場者が理解しやすいフローとなっているかは疑問に感じる。例えば日本の自然観を素晴らしいと感じた後に、いきなり日本と世界をとりまく課題という形になっており、シームレスに行かないのではないか。むしろ、日本と世界をとりまく課題の後に、日本古来の文化・知恵を考え、課題解決に向かうというスタイルも良いのではないか。
- 博覧会の開催前から様々な取組をやることは非常に共感する。WEB社会は、国内はもとより、世界に対しても発信できる。例えば、博覧会会場で、自然観のような観念的な説明や、いけばなを並べられていても真意が通じない。いけばなの構成では天・地・人、真・副・体のような伝統があるが、一言で言えば色々な植物の良さを組み合わせる風景をつくるということ。真・副・体は、3つで支えあうという知恵が背後にある。自然観というときれいごとだが、本当は明日の知恵にもなっている。これを展示だけでうまく伝えることは難しい。よって会場来訪の事前学習として、WEBによる連続レクチャーが必要。視聴者も博覧会の参加者としてカウントする方式にできると良い。

- 最近では MEXCBT（文部科学省 CBT システム）ができており、何万人ものこどもがデジタルに接続できている。そのため、例えば博覧会に参加いただいたこどもに対し、博覧会がどうだったを聞くことができる。そういったシステムの対象範囲が、4年後にはもっと広がっていると思われ、面白い取組ができるのではないかと。
- 展示の見せ方については、先ほどご意見があったが、花から入って今に繋がるというよりも、現代の課題をまず捉えることが重要。2022年になって自殺が大きく増えている。非常に大きなディストーションがあったといっても精神面への影響がすぐに来るわけではなく、時期的なズレがある。つまり、2027年に博覧会を開催する時に、我々が真摯な目で見つめざるを得ないのは、新型コロナウイルスの流行とウクライナ危機が人類に対して何を与えたのかということ。それに対し、博覧会の持つ意味・メッセージを出さざるを得ない。
- これからは、がんで亡くなる方より災害で亡くなる方が多くなるほどに、災害が激甚化・頻発化する。こういったことに対し、農の空間やプラネタリーバウンダリーはどう役割を果たすのかについては、直球で訴えかけていただきたい。広い視点で捉え、そこにデジタルが寄り添いながらアシストできると良い。
- 色々と体験できるような計画になっていると感じた。
- 現在置かれている状況を踏まえると、4,5年後はもっと大変な状況かもしれない。アンテナを高く張って検討を進めてもらいたい。今後どのような事情が起きるかは誰も分からないが、よく言われるのは、生産量が落ちなくともアクセスがなくなると大きく人の生活が変わってしまうことや、自然へのアプローチについても近視眼的に行ってしまうことを人間は歴史の中で繰り返していること。そういったことも振り返りつつ、今後どういう取組をするべきかを示せると良い。
- 懇談会では技術の議論はしてこなかった。農業の生産性については、技術の進歩で大量の人口を養ってきた。全てを文化論でまとめるのでは、農業の一番大事な部分が伝わりにくい。将来への技術的なアプローチの議論、せめてトピックスの伝え方は重要。
- 例えば園芸関係に関しては賛否両論あるが、ゲノム編集やスマート農業で生産性を単位面積当たりで極度に上げていくなど、様々な技術のアプローチ方法がある。そういった技術については園芸関係に関連付けた形に限ってお示しはできるのではないかと。
- 季節の変化も重要な要素になる。会期が半年間であり、複数回の来場者を受け入れるため、また博覧会の連続的発信のためにも、展示などに変化が無いと飽きてしまう。1か月空くと風景が全然違うという点が農業の良さでもある。時間軸で展示が変わるためにはアウトドアが非常に重要。通常の博覧会であれば、利用者の休憩の場で、レクリエーションのためのアウトドアでしかないが、今回の博覧会ではフィールドそのものを全て意味ある空間とする必要がある。会場を区切ってしまふのが今までの博覧会の通例だが、空

間として連続し、空まで広がるくらいにできると、立地がいかせてとても有り難い。

- 建築の中と外が切れることが今までの博覧会における一番のつまらなさである。屋内は人工的な映像の世界で、外はきれいな花が咲いているというイメージ。屋内外がシームレスになるという印象が出てくると、色んな意味で良い感じが出せる。
- 最近の現場で面白いのは、シースルー型のヘッドマウントディスプレイ（HMD）をかぶって現場管理をすること。現場の実際の景色と、そこに何が立ち上がっているかというのが完全に重なって見える。例えば、将来の農が季節によってどう変わるのか、災害でどう影響を受けるかということが現状の風景がみるみる変わっていくことが重なって見えるというのは、通常のHMDとは違った形で圧倒的な迫力がある。
- 4年後を予測することは非常に難しい。2025年の大阪・関西万博の展示と重複してしまうと面白くない。
- HAPSは基地局機能を搭載し、2万メートルに上げる低位度計になる。2万メートルから見ると、通常の資源衛星と比べると、相当細やかなところまで見える。しかしHAPSはまだまだ不安定。先ほどのシースルー型HMDは現在でも使われているため、リアリティのあるコンテンツは作れると思うが、他の展示内容との調整は必要になる。
- 本出展の展示については、農や自然災害のようなものが非常に大きなテーマになっており、テーマが比較的シャープにできている。そういうものが迫力のあるもので人間に突き刺さるような形で見せられると、かなり強いメッセージ性が出せる。
- 農は現物に意味があり、映像だけではないため、そこで勝負ができる。
- 先端技術と合わせ、足腰を鍛える日本にすることも大切。特に植物資源の観点では、例えば植物園やジーンバンクもきっちり政府出展の中で取り上げていただきたい。この点に関しては、日本は決して先進国のレベルではない。ジーンバンクについては、日本は世界6位だが、今後維持できるかどうか非常に重要な問題。ましてや植物園に至っては、到底欧米諸国、中国の植物園に及ぶところではない。政府出展で取り上げ、植物資源等の収集保存を図っていくことを訴えるべき。欧米や中国が保存している植物の種と日本が保存しているものは一桁違っているのが現状ではないか。
- 技術や展示があったが、人にも焦点を当てていただきたい。花に限らず、農業従事者や造園技術者が全国各地で頑張っているおかげで、花や緑、農が維持できている。後継者として次の世代にも参加してもらう必要がある。自治体別の生産額の一番多い作物の紹介や、ガーデンツーリズムに関する全国の庭園を紹介するなどが考えられる。
- 基本計画図では、博覧会協会が検討する会場の主たる計画動線の流れと政府出展が検討する動線の流れの調整をお願いしたい。
- 政府出展区域内に竹林があるが、現在、樹林地の管理が不十分で竹が異常に繁殖する問

題は都市でも中山間地でも大きな課題になっている。美しく管理をして竹を見せるとただ美しい庭園の要素であると感じて終わってしまうため、こうした竹の問題や管理方法についても表現していただきたい。

- 順路について、これから議論する必要のある内容。
- 竹林の管理は全国的にも問題であり、受け止めていく必要がある。竹の活用を絡めることも1案になる。
- 会場の竹林は今から手を加えれば良い竹林にできる。昔から用と景のバランスある桂離宮の笹垣のようなものが何故桂川にしかないのか不思議に思っている。日本の職人は竹を上手に活用でき、編んで見せ、洪水防止にもなり、美しさもある。竹垣は伝統庭芸の粋である。造園界の頑張りどころだと思う。
- 出展区域内の動線については、農村にあるようなあぜ道や獣道、スラロームが美しい。
- また、入口と出口を決めるのではなく、もっとオープンで自由な作り方を検討しても良い。参加者は主催者や責任者の違いは意識せずに関係なく行動する。今回の会場の立地と環境の良さを考えると、本当に全体が田園的ガーデンとして一つの空間であってほしい。周りがゆったりと自然で囲われ、アップダウンや水景もあり、変化する。全体がひとつのマイクロコスモスになっており、その良さを伝えるためには、ゲートを多く作って、区域を分けるのではなく、全対をオープンにする感じが望ましい。インドアとアウトドアに二分することも同様で、ひとつの連続した風景になっている点が日本の農村の良さである。できる限りバリアやエッジを作らない空間としてほしい。
- 博覧会協会と政府出展のテーマや利用方法、展示内容についてはワンチームで十分な調整が必要。
- ゲート性を強く出そうという意識はないと理解している。人をどういう風に流すかという観点での入口、出口であり、出口が一つだけでなく、途中から分岐するというのも一つのやり方。詳細についてはこれから考える必要がある。
- 屋外展示の中に、四阿やフォリー (folly) のようなお茶を飲むような場所があると楽しい空間になる。
- 欧米から見た日本の特徴の1つにアジアモンスーン気候があり、園芸の観点では土と気候が非常に重要。本日の資料で言えば、「日本の自然観」から、「日本と世界を取り巻く課題」に飛んでいるが、例えば、ヨーロッパでは、カニキュールや熱波の時もカラッとして焼けるような暑さで、日本の蒸し暑さとは異なる。そういった気候を体験していただくことも重要であり、その気候の中で日本の農や園芸が育まれてきたことをしっかりと説明することが重要。そこで一番気になるのは、夏場の屋内空間と屋外空間の繋ぎ。蒸し暑

いため屋内は冷房をかけて外気を遮断することになるかもしれないが、どのように屋外空間と繋げるかが課題になる。ウクライナ危機もエネルギー問題と関連しており、日本がエネルギーに対してどう向き合うかもこの夏場の利用方法の観点で答えを出していく必要がある。深い庇等の日本が古来培ってきた日本家屋の技術の蓄積をできる限り活用して、屋内外の空間をつなげられると良い。

- また、屋外展示全体でグリーンインフラを実装するとあるが、2027年になった時点で、もしかしたらグリーンインフラはもう古びているかもしれない。都市計画基本問題小委員会では、GX（グリーントランスフォーメーション）も議論していることを踏まえ、GXなども検討しておいた方が良い。
- さらに、先ほどご意見があったが、日本の高い技術を持った方々と何らかの形で直接触れ合えるような機会やその技術を知る機会があると良い。フロリアード2022の日本国出展においても、人に焦点を当てたビデオがあったが、ビデオではなく、技術者の方から直接話が聞けるような場があると非常に良い。多くの来場者に対応することは難しいため、例えばAR等のデジタル技術で補完することも考えられると良い。
- 茅の庇や、ミスト・水の流れを組み合わせても良い。ミストの技術はここ10年ぐらいの新しい技術で、そういった新しい技術に元々のモンスーン地域の古い知恵を組み合わせた際に何が出来るかは実験してみたいところ。
- 吉阪隆正氏が伊豆大島で石を積んで、雨水の無い地域で空中の湿気から水を取る試みを提案した。農大のジプチ共和国での砂漠緑化研究でも同じ原理を具体化した。そういった取組は子どもへの環境教育と遊び、会場ではエコアートやオブジェにもなる。あるいは、アジアモンスーンを爽やかに暮らす方法として、大学生たちの参加でコンペをしても面白い。学生から職人まで幅広い人々がこの博覧会に参画することも重要。
- アジアモンスーンについて、乾燥している国からみると、日本はどの季節もモイスターな感じがするという。ありきたりだが、ミストなどでモイスターな感覚をより体感できる場所を作ることも一案。
- また、モンスーンについては、河川の氾濫が1つの特徴。政府出展区域にも川があるが、平常時や水が溜まった状態を見せられると、その特徴が出せるのではないか。
- 日本では専ら温室を作るが、イスラエルなどでは、冷室で農作物をつくっている場合もある。ハウスの入口にグラスファイバーの幕を下げ、そこに水を落としながら、強烈な風を送る。冷たい風が入ることで冷室になり、様々な野菜や果物を地中海に送り出している。植物の生育環境をコントロールしている点で両者は同じ。ただエネルギーを使ってしまうため、江戸時代の氷室のようにエネルギーを使わない方法を上手に見せることで、環境と共生する日本伝統手法を伝えるのも面白い。

- 基本的には今日の資料で大きく致命的によろしくない点はない。
- 環境については、流頭の配慮、水辺の連続性には気を付けていただきたい。
- また、農や自然との関わりの点で、二次的自然が出てくるが、都市部からすると里山の環境は心理的にも遠い感覚がしてしまう。里山の概念を街中で取り入れる点を意識して、展示を展開してもらえると良い。
- 竹林の管理の問題については、竹林と暮らしとの関わりを見せながら管理について示すと分かりやすくなると思われる。
- それから、広報が少し軽い扱いとなっており残念。参画のプロセスを提供するという考え方を取り入れていただきたい。機運醸成で留まるのではなく、参画のプロセスを開催前の段階から提供していくことが重要。とりわけ、みどりの食料システム戦略に関しては、生産者はもちろん、消費者がしっかり暮らしとつなげてSDGsや環境のことを学んでいただくことが非常に大切。開催前からの取組結果を会期中に参加者としてフィードバックできるような参画のプロセスを検討いただくと、今の時代に合った双方向の博覧会にできるのではないかと。
- 地域おこしの観点で、地方自治体の日本を代表する農作物や農産加工品を活用・発信することも一案。ナショナルデーのようなイベントもある。それと同様、全県にお願いしてプリフェクチャーデーを実施し、会場外の日本国の多様な存在を感じさせるような仕掛けを期待したい。それが地方創生の支援にもなる。
- みどりがある暮らし、あるいは里山や農地がある日本の暮らしに関して、多くの人が再評価し、ある種の価値や良さに気付いていただけるような仕掛けは必要。もう一度日本の自然を見直すことや、日々の暮らしの中で緑とか自然・日本の風土環境が私たちの幸せを支えてくれていることに対する気づきを多く得られる場であってほしい。また、その場で学ぶことや、その場で感じることは当然あるはずだが、それがしっかりと伝わったということ、ある種可視化することが重要。例えば訪れた方にアプリや簡単なオンラインアンケートを実施して、政府出展から得られた気づきを言葉で集約することや、数値化・データ化していくことによって、来場者数のアウトカムだけではなく、今回の試みが持つ意義や、教育効果・波及効果をしっかりと打ち出せると良い。
- 博覧会では、コンセプトを一般の人たちにどう伝えるかが非常に難しいところ。そこで建築家やアーティストが果たす役割は小さくない。来場者が身体的にどういう体験をすることによって、記憶に残る博覧会になるのか、その先の人生の考え方や意識を転換していくような体験の強度を生み出せるかを検討する必要がある。例えばトーマス・ヘザウィックは2010年の上海万博の英国館でパビリオン賞を取ったが、見た目にも非常に美しく、大きな建物は作らず、広大な余白の空間を作ることで注目された。また、2012年のオリンピックの聖火台では、各国が持ってきた花びらをトーチにして、閉幕後は各国に持ち帰ることができるという、サステナビリティを追求する考えを持っていた。

- また、屋外と屋内の繋がりが1つのキーワードになっているが、美術館も本来は作品保護のために閉じられた空間である必要があったところ、市民に開かれた場所とするため、四方八方から館の中に入れるような考え方に変わってきている。そういった事例は多いため、参考にできるのではないか。
- 外部からの見せ方については、例えば技術の革新と共にプロジェクションマッピングをするアーティストは増えてきた。建物に投影をする取組も多く、博覧会に来なかった場合も、近隣から少し映像が見えるなど、一部が見えるようにして会場内に入ってみたくなるような工夫は色々考えられる。いずれにせよ、コンセプトの視覚化・体験化のプロセスにおいては、クリエイティブな才能をいかさざるを得ない。
- 先ほどカヤという言葉が出たが、昔は茅山があつて、それを共同作業で管理をしていた。本出展の計画で里山を検討するのであれば、茅山の一部でも再現し、四阿を茅葺にしてみるなどが出来ると良い。
- 農村では、弁当を食べたり雨宿りしても良いように里地里山にはちょっとした小屋がある。農の風景には巨大な建物が1つよりも、小さな小屋が散在する方が似合う。道すがら、まさに道草を食いながら、農小屋で飲食をし、少し休憩した。農村のスローライフだ。時計を見ながら生きるのが今だが、そういったスローライフも見せたい。
- 意外に日本は日照時間が短く、光と影が演出できるような空間ができると、半屋外の空間にも反映できて良い。
- 広報・市民参加の観点で、植栽なども皆が参加して今から植え始めるなど、博覧会会場に行く前から横浜市民などが様々な機会に参画できるよう、3年前イベントやプレイベントなど気運醸成が重要。
- 博覧会の正式略称が「GREEN × EXPO 2027」に決まったが、政府出展のテーマの候補に「みどり」があった。グリーンはアリア語では生長するという意味で、「生命」の意味が重要。里山イニシアチブは、国民の間に里山という言葉が一般化されていなかったからアピールすることにした。グリーンは既に地球・環境・健康・有機・生命の意味で広く国民にも企業にも一般化され完全に日本語になっている。
- 「GREEN × EXPO 2027」のポスターを拝見して、シンプロでとても良いと感じた。あとは背景の花から順次緑の公園、森や自然、そして農の風景へと GREEN の連想イメージを拡大すべく、ポスターを次々新陳代謝してはいかかがか。

以上